

冷蔵庫と聖母さま

phenomenon

洗濯機の上には父が背中を丸めて死んでいて、母は温かい湯船から真白い脚を覗かせた。洗面所に立ち尽くしている私はなぜか冷静で頭が冴え切っている。空気は少し濁った水色で、家族みんなで見た海の、水平線のすぐ上の空の色を思い出させる。海の青に負けてほんのり白んでいた。

これは夢のようであって、たぶん夢なのだろうと思う。けれど、ただ現実であってほしい願望に希望を捨てきれないと、数日前の西洋哲学の授業で「今の瞬間が夢でないと証明することは不可能である」といった内容に触れたのを思い出したことが私の断定を遅らせる。しかし、洗濯機の上で父が死んでいる理由や、まだ昼下がりののに母が湯船に浸かっている理由にまったく見当がつかないあたり、これは夢であるという予想を着実に現実にしていった。

「あんたのせいで死んだんじゃないの？」

母が浴槽の中で虚空を見つめながらたしかに私に向けて言った。まるで心ここにあらず、といった具合で無気力を通り越して全てにおいて絶望したような、生きることを放棄したような言い方だった。磨りガラスから差し込む日の光が、母の肌で柔らかく反射されて、ぼとりとお風呂場の床に落ちた。それ

を私は観測した。光は私と母との間にしつかりと分かりやすく落ちていった。

「ゆきー」

母の声が聞こえた。たぶん幻聴だと思う。きつと母は今お夕飯のための買い物に出かけているはずだから。最近特に酷くなってきた。自分の部屋にいると母の声の幻聴が聞こえる。私の名前を呼んでいる、声を張っている。キッチンにいる母が、自室にいる私を呼ぶためだ。これに聞こえないふりをしたり、また実際に聞き取ることができずに反応できなかったりすると、酷く叱られる。だからいまだに自室でもヘッドホンで音楽を聴くことができない。仮にそれをしたとしても母からの呼びかけの可能性にびくびく怯えて、音楽を楽しむことなどできないだろう。ヘッドホンをしていた私が全て悪くなるのだから。

私にとって「怒られること」や「叱られること」は最も大きな恐怖であって、それ以上に私を動かす力となるものはなかった。

幼い頃から、私の家では怒られるとき立たされた。その目の前に父が太股を開いてどっしりと座る。私は直立しながら父からの説教をひたすら聞き続ける

ほかなかった。長い説教だった。こちらに考えさせるタイプの説教であった。視界が揺らむ、はじめから揺らんでいる、それが溢れてしまいそうになる。溢れてはいけない。泣いたらなおさら怒られる。泣いたら怒られる。涙が止まらない。呼吸が苦しくなる。くうきを、吸わないと。さんそを、けつえきに、のせない。息が切れる。生きが切れてしまいそう。手足が痺れだす。立っている感覚も、指先に血液が通っている感覚も無くなる。他人様の身体に私の意識だけが乗り移ったようだ。その身体の中に入っているのはたしかに私なのに、なに一つ自分の意志で動かすことは叶わない。涙は溢れる、息が切れる、手足は痺れる。何か問いかけをされても、こんな過呼吸の身体ではなんの受け答えもできない。それどころかこんな状況では脳みそも十分に機能してくれない。考えることさえ制限される。耳も遠くなる。聞き取れない。聞き取ることが、できない。父の口が動いていることが見て取れる。何を言っているのかが分からない。言葉を聞き取ることができない。父の口調がさらに強くなる、私は今、怒鳴られている。なんでだろう。思考を巡らせて、早く解に辿り着きたいのに、脳みそは動いてくれない。考えを巡らせようとすると身体のコンドイションはますます悪くなる。とうとう背中も痺れ始めた。私もそろそ

ろ終わりだ。背中が痺れる、熱い、熱い。今、私は背中に龍を飼っているのだ。幼い頃に絵本で見た、なによりも強くて、かつこよくて、みんなを背中に乗せて空を自由自在に駆け上がる龍が、私の背中で火を噴いているのだ。視界はすでに白んでいる。どうせ何も見えない、聞こえない。私は自然に身を任せることにする。もう、ぜんぶ、どうでもいい。

家は私にとって安らげる場所ではない。私は、私の城が欲しかった。なにも、プリンセスのような生活がしたいと言っているのではない。私が私でいられる、百パーセント安心できる、帰る場所が欲しかった。

早朝、キッチンに立つ。手のひらの上で豆腐を切る。すつ、すつ、と包丁が豆腐を切り開いていく。私はお味噌汁が嫌いだ。小中学生の頃、毎朝強制的に飲まされていた。それは当たり前に母からの愛情であったことに間違いはないのだが、毎朝まだ起きていない胃に熱い味噌汁を流し込むことは私にとって苦痛以外の何物でもなかった。嘔吐してしまいそうな口元を抑え、駆け足で玄関を出ていたことに良い思い出などない。

私の虚ろな瞳は手のひらの豆腐、から二十センチほど先のシンクに移る。今グサツといったら、私の指四本はこのシンクにぼとりぼとりと落ちるのだろうか。

十年ほど前の私が立っているのが見える。キッチン、父の椅子の真ん前に直立している、息を切らしている、顔を涙でぐちゃぐちゃにしている私が見える。

抱きしめてあげたい。あなたは、いい子だから。すてきな子だから。いらぬ子なんかじゃ、ないから。わたしの前では、だいじようぶ。涙を流して、だいじようぶ。なにも、咎めたりしないから。怒ったりしないから。すべてを包み、抱きしめるから。わたしの胸では、思う存分、泣いていいんだよ。我慢しなくて、いいんだよ。

時刻は六時十分をまわった。まだ誰も起きてこない。煮立った鍋にこの豆腐とわかめを加えて煮えたら味噌を溶かし入れる。家族が起きてくる前には完成するだろう。それまでには、この潤んだ瞳をどうにかしなければ。

ずっと、聖母さまを求めている。でも、それを誰かに押し付けることの残酷さ、押し付けられる側の苦痛を考えると、誰かを聖母さまに見立てて接する

なんてとてもできなかった。

私は今日も、キッチンに立つ。女としての役割を全うするために。与えられた役を、しっかりとこなせるように。

「ゆき、好きだよ」

そう言いながら私を優しく抱きしめてくれる彼の胸の中でも、私は無表情だった。別に好きじゃなかった。今も彼に対して特別な感情を抱いてはいない。告白されたからそれに応じただけであつた。なにか変わらなかつた。私でも人を愛せるかもしれないと期待した。無理だった。

「わたしも、はるくんのこと、好き」

顔を彼の胸にうずめる。表情は見せない。彼が頭上で微笑んでいるのが空気でわかる。私の無表情も空気でばれているのだろうか。

彼がゆるりと腕を解き、私の顔を覗き込む。私は少し恥ずかし気にほほ笑んで見せる。彼のあたたかい手のひらが私の頬に添えられる。キスの合図。なんとも思わない。これがお仕事だったらいとお給料がもらえるのだろうか。私はそっと目を閉じた。

気持ちいと苦しいは似ていて、私たちは苦しいの

その先の気持ちを得るために喘ぎ喘ぎ生きていくのだと思う。その二者は同じ直線上にあつて、時には重なることだつてあるのだと思う。

人生の苦しみの先にも快樂が用意されていれば、私はいくらか救われたのだろうか。それとも、だからこそ中途半端な苦しみから逃げようとはせず、命が相手でもなあなあな、ぬるま湯のような関係が続いてしまうのだろうか。

気が付くと、私はまたあの光景の中にいた。濁つた水色の洗面所。正面に見える半分開いたバスルームのドアからは生気を失つた母が、右側には洗濯機の上でうずくまつて顔も見えない父があつた。私は急に怖くなつて、洗面所から必死で命からがら逃げて庭に駆け出すと、祖父が私に激怒して追いかけてくる。理由もなく私は精一杯で逃げる。なんでか分からない。自分が叱られている意味が分からない。幼い頃からそうだった。わからない。だから繰り返す。「自分で考える」なんてそんなのばかりだから尚更わからない。だつて自分のなかで最善だと思うことをして怒られているのだから。

「ゆきちゃん、だいじょうぶだから!」
何が大丈夫なのかが何一つわからない。わからない

いことが多いと混乱してしまつて頭が痛くなる。呼吸が苦しくなる。苦しい、でも、逃げないと。捕まつたらきつと、また身体を触られてしまう。

男の人から好かれることなく良い人でありたいと願う。二十やそのあたりの女が男をひっかけるのは簡単で、逆に二十やそのあたりの女が男と友達になるのは至難の業だろう。

何を求められているのが容易にわかる。私は少女のようなあどけなさと、女の肉体のなめらかさをエロティックに演出し、そして母のようなやわらかさで包み込めばいい。誰もが母を求めている。それは私も例外ではない。

オカアサン、どこにいるの。オカアサン、オカアサン。私は真つ暗闇の中でオカアサンを探した。真つ暗闇であるから、誰も私の姿は観測できない。だからこそ、思い切り幼い声と口調でオカアサンを求めることができた。

「オカアサンってどんなひと?」
小さな女の子がてくてくと私に近づき、問いかけてきた。私はしゃがんで、女の子とおよその目の位

置を合わせて言った。

「えっとね、オカアサンはね、やさしくてね、なんでもおはなしをきいてくれてね、ぎゅーってしてくれてね、すっごくあったかいの」

自分でも気味が悪くなるくらい幼い口調で話した。しかし自分の姿が暗闇のヴェールで包まれている今ならば、さまざまなのが許されるような気がした。「じゃあわたし、おねえさんにやさしくして、おはなしきいて、ぎゅーってして、あったかくしてあげれたら、オカアサンになれる？」

そんな少女の言葉を聞いて、私は茫然としてしまった。少女は無邪気に続ける。

「わたしね、おおきくなったら、オカアサンになりたいの」

吐き気がした。女の子ではない。幼稚園の卒業アルバムの子の将来の夢の欄に「おかあさんになりたい」と書いたことを思い出したからだ。

夢の中で、ろうを食べた。ろうそくの、ろう。なぜ私がそうしたのかはわからない。昼下がりの夢だった。私の悪い夢はいつだって昼下がり。じゃあ、昼間になんて、眠らなければいいのに。だって、最近の私はいつだって、ねむたくてねむたくてしかた

がないの。そう、じゃあ仕様がないわね。

自室で色鮮やかな美しいキャンドルに火を灯して、穏やかな心でその火が揺らぐのを眺める。それは癒しの時間になるはずだった。無論、そんなはずはなかった。ベッドになにをするでもなく横になっていた私はおもむろに起き上がり、キャンドルの光に夜の虫のごとく吸い込まれていく。私の視線がその光から外れることがないまま、容易に触れることができない距離まで来てしまう。

数十秒間、何もせずにただその灯りをじっと見つめる。時折揺らぐ、でも決して消えることのない小さな炎は私を飽きさせることを知らなかった。

とろり。ろうがとろけて私を誘惑した。美しく艶めいていた。

なぜかそのときの私は『それ』を食べれば大丈夫になると思い込んでいた。何がどう大丈夫になるのかなどの詳細は一切わからない。でも、私は大丈夫になりたくて仕方がなかったから。たとえそれで死んじゃってもしょうがないことだと思った。

『それ』は手で持った瞬間に固体になって私の指の曲線に沿ってはりついた。それを私はしゅぶった。誰にも見られていないのに、誰かに見せつけるかのように、手つきは、表情は、吐息はだんだん艶っぽくなっていく。『それ』はまったくおいしくはなかつ

たけれども、私は恍惚とした瞳で頬に血色を宿しながら『それ』を無我夢中でしゃぶったのだ。

「ゆきは、もうあの頃の可愛いゆきちちゃんじゃなくなっちゃったのね」

些細なことだった。母はきつと、明日の朝にはこの発言を忘れるのだろう。私はずっと、覚えてる。

母が目を潤ませる。泣きたいのはこっちだよ。これだから「女は都合が悪くなったら泣く」だの「女は泣けば許されると思ってる」などと言われてしまうのだ。私は幼い頃からこの家庭で「泣いてはいけない」と教育されてきたというのに。

そもそも幼い頃の私のほうが愛されていなかったように思える。私には兄がいる。そして母は兄ばかりを可愛がった。反対に父は私をよく気に入っていたが、それには胸やお尻のスキンシップが含まれていたため、とても嬉しいものではなかった。心の底から嫌だった。普段はそんなおちやらけた調子でいるのにも関わらず、説教のときだけ一丁前に声を低くして威圧してくるのが大嫌いだ。幼い頃の私は「家族からの愛情」なんて感じる事ができなかった。私だけ貰われた子なのかな、と思ったのは一度や二度ではない。

「ごめん、でもその日は前から友達との予定があつて、その子と予定が合うのその日だけで」

「家族よりもお友達が大事なの？」

「どっちが大事とかじゃなくて」

「なんでお母さんの言うこと聞いてくれなくなっちゃったの！」

「お母さんは私を友達との約束を破る娘に育てたいの？」

「お母さんの言うこと聞いて！」

大きな声が苦手で、思わず顔を顰めてしまった。

こうなつたお母さんは、私がどんなに丁寧に冷静に語り掛けても何も話を聞いてくれなくなる。こんなとき、お兄ちゃんがいてくれればと願わずにはいられない。この人のヒステリックをなだめるのは兄の役目だった。母は兄にはいい顔をしたがる。兄自身もそれをしっかり把握したうえでその役を買ってくれていた。

「もう、ゆきちちゃんもお母さんのことおいていつちやうの？」

そんな悲しい瞳でこちらを見ないでほしい。目尻による皺が痛々しさを増大させている。

兄は三年半前に東京の大学に通うために家を出た。さすがの母も、優秀な兄が実家から通えるどの大学よりも遙かにレベルの高い大学に通うために家を出

ることを止めることはできなかった。私も兄が母と接する際に少し頬が引きつっていることに気が付いていたため、『これ』から解放されることができ兄を喜ばしく思った。

私も再来年にはこの家を出るんだ、と心に決めて、それをモチベーションに受験勉強を頑張った。親とも話し合いを重ねて「一人暮らしのほうがいいけれど家から遠すぎない大学」を第一志望校に決めた。その大学までは公共交通機関で片道二時間ほどかかるため、その大学に通う地元の先輩も大学の近くのアパートを借りて一人暮らしをしているようだった。私は無事、その大学に合格することができた。やっとこの家を出ることができると思った。無理だった。

父に止められた。

「電車でも、通えないことはないんだろ？」

本当に悪魔だと思った。だからこそこの家を出たいのだが。でも、お金の話を出されると、私はなにも言えなかった。

「よく調べてみたらあの大学の周りでアパートを借りるよりも電車を通ったほうが安いみたいだな」

この家でお金を稼いでいるのは父だけだった。そのうえ大学の学費も奨学金を借りずに父が払ってくれることになっている。だからこんな話をされては、

通学時間の長さなど言い分のひとつにもならなかった。私はただ、父の言葉に従う他なかった。

「よかったわね、ゆき。ゆきもお家から通えてうれしいでしょう」

この家にいれば家事をしなくていいんだから。

母の言葉の後ろに、そんなことが透けて聞こえる。母は専業主婦でこの家の家事をほとんどすべてひとりでこなしていた。立派だとは思う。しかし、こういった「私がしてあげているんだから」感が私は大嫌いだった。私は早起きしてあなたのお弁当を毎日作ってあげているんだから。みんながテレビ見るときも私は洗い物してあげてるんだから。そういったアピールが私は吐きそうなほど嫌いで、率先して家事の手伝いをするようになった。今ではこの家で真っ先に起きて朝ごはんの準備をするのは私の役目になったため、母のうざったい「みんなのために早起してるんだから」は聞かずに済んでいる。

母の言葉から久しぶりにこの家の理不尽を体感した気がした。最近はあまり感じていなかったのに。私が大学生になってから何かと理由をつけてこの家にいるのを避けていたせいもあるだろう。たくさんこの家庭に関する嫌なことを思い出してしまった。

約三年ぶりに腕を切った。まだ夏は少し先だから

大丈夫。ほんとうは大丈夫なことなんて何一つない。

お臍くらいまであった長い黒髪をばつさり切り落とした。何年もかけて伸ばした髪であったのに、途端に汚らしく思えてしまったのである。女を女たらしめる背中まである長い髪が、いきなりとてもいやらしいものに見えるようになってしまったのである。これは一時的な衝動だ、と自分をなだめはしたが、自身の長く黒い髪からゴキブリがうじやうじや次々と湧いてくる幻覚を見て、とうとう耐え切れずに、文具用のはさみで肩の上までばつさりと切った。

これも夢かと思ったが、翌朝目が覚めて起き上がった瞬間の頭の軽さに違和感を覚え、ああ、あれは現実だったんだな、とあまりに寂しい喪失感に駆られた。そして地元のいつもの美容室の電話番号を調べ始めた。

何があっても学校には毎日通う。それが私の家の普通だった。「休みたい」「サボりたい」などは一切言わずに毎日真面目に登校する私を、両親は誇らしく思っているようだった。しかし幼稚園、小学校、中学校、高校の全てで皆勤賞をとって、その証に家

の玄関に並ぶ皆勤賞の盾を、私はずっと気味悪く感じていた。今日もそれを横目に重いリュックを背負って家を出た。

学校で倒れてしまった。大学生になってからはじめてだった。もうあの過呼吸は治ったと思っていたのに。久しぶりに呼吸ができなくなって、それに伴ってさまざまな嫌な思い出が頭の中を埋め尽くして、くらくらしして、ぜんぶわからなくなつて、もうだめだった。

私の中ではもうさまざまなことが限界なのだと思う。もう全部、終わりにしようと思った。

今夜は、冷凍庫で眠ろうと思う。きっと明日の朝には心地よくすやすやと眠った、羊水の中の、ピンク色の私を観測できるでしょう。

梅雨と夏の狭間の真夜中に自室でひとり、こんな意味のわからない遺書を書いていて。火傷してしまいうようなほど熱い紅茶を淹れて、終わりの準備を整

える。人生最後のToDoリストを作る。いつもどおりレシートの上に書く。いちばん気を遣わずに書くことができるから。失敗したら何の心残りもなく捨てて新しいものを用意することができる。人生は一度きり。だからこそ大事にしすぎて、その重みが私には窮屈で耐えられなかった。慎重になつてなにも為すことができなかった。生きている意味がない。もう、中途半端な自分とは決別したい。

人にかける迷惑は極力小さくしたほうがいい。バイトのシフトも来月からすべて外してもらおう。あと、彼に自由になつてもらおう。私のことを嫌いになつてくれれば上出来だ。なんで彼は私のことが好きなのだろう。そこそこ多くの時間をともに過ごしていたはずなのに、私は何も知らない。最後に感謝の花束でも送ったほうがいいんじゃないか。今までこんな私の隣にいてくれたのだから。

はるくんと出会つたのは一年半前だった。付き合い始めたのは半年前。基本男の人は薄っすら嫌いだが、彼からはそういった男性特有の気持ち悪さをあまり感じなかったから告白されたとき、この人ならいいかな、と思つて付き合つた。

彼は私のことを理解しようとしてくれていたと思う。彼は、私が嫌がりそうなことを絶対にしなかつ

た。それがかなりうれしかった。

はるくんのこと、ちゃんと好きになればよかったな。最後だから感傷的になつてしまつて自分が自分でもわかる。

スマホの通知音が鳴る。

刹那、身体が無意識に硬直する。通知音は嫌いだ。電話もメールもDMも。安心しきつていたひとりの時間を外側から侵略されているように感じてしまう。本当は誰も敵なんかじゃないのに。周りの人たちはみんな味方であるはずなのに、私が勝手に敵のように解釈してしまふ。畢竟するに全部私が悪いということだ。

とりあえず誰からの連絡かだけ確認する。早急に返信したほうがよさそうな事務連絡にだけ既読をつけて返信をしよう。雑談であれば、もう夜も遅いわけだし返信は明日の朝でいいだろう。

『今から会えない？』

はるくんからだった。おどろいた。

のも、そもそもこんな真夜中に連絡されるのも。理由は簡単だ。私は普段そういった類の連絡を嫌うからである。付き合いはじめてすぐに「私、LINEとか

DMとか得意じゃないから事務連絡以外はあんましないかもー」とは伝えていた。今考えるとはるくんはよくそんな私と付き合ってくれてたなと思う。

人生の終わりの直前にはじめてのこと。少しわくわくした。人からの連絡に心が高鳴ったのも初めてかもしれない。数分悩んで、返信することにした。

『いいよ、どこで会う？』

彼からの返信はすぐに来た。

『今、ゆきの家からすぐのコンビニにいる。家の前まで迎えに行くよ』

驚いた。彼の住んでいる大学近くのアパートから私の家までは電車で二時間、車でも一時間半はかかるはずである。気軽に思いつきで来ることができる距離ではないのだ。最初の連絡から数分待たせてしまったことに罪悪感を抱きつつ、

『五分後に出るね』

と返信をした。

意味が分からない。わからないけれど、なにもわからないまま進んでいく世界に身をまかせようと思った。どうせ死ぬ身体だ。今の私は無敵で、きつとなんだってできる。今の私は、今までの私の人生史上いちばん解放されている。私はパジャマからスウェットパンツとTシャツに着替える。下着はこのままブラトップのままでもいい。きつくてかわいい妖艶

なワイヤー入りのブラなんて今の私には必要なかった。自室の全身鏡の前に立ってほんのり笑って見せる。長いことロングヘアーだったが、ボブもなかなか似合っているかもしれない。頭が軽い。今までよりも少しだけ動きやすくなった。

両親にばれないように、足音を潜ませながら階段を一段ずつ丁寧に降りる。できるだけ音が小さくなるように手をあてながら玄関のドアをゆっくりと開く。そこには優しい笑顔の彼がいた。

「お誕生日おめでとう。逃げよっか」

私はちょうど、二十歳になっていた。

立ち尽くしてしまう。固まって動けなくなった私の腕を彼はそっと引く。笑いかけてくれる。意味がわからないまま、私の双眸からはぽとりぽとりと大粒の涙がこぼれ落ちた。

「わたし、はるくんと逃げたい」

「うん、ふたりで逃げよう」

はじめて本当の意味で家を出た。はるくんに手を

引かれてがむしやらに走った。走ったのはかなり久しぶりだったからすぐに息は切れたし、速度も遅かった。でも一生懸命に走った。濡れた頬が夜風に触れられてひんやりする。その冷たさに抗うように口角は自然と上がる。今までの人生でいちばんワクワクした。

近くの公園のベンチに並んで腰を下ろす。私はもうくたくただ。ひととおりの息が整うとはるくんがおもむろにベンチから腰を浮かせ、自動販売機の前に立つ。星のない真夜中で人工的な光に照らされている彼は、その強すぎる光に呑み込まれてしまいそうに思えた。一瞬、はるくんが自動販売機に吸い込まれて消えていってしまう幻覚を見た。急に怖くなった。それと同時に私は彼の腕を強くぎゅっと掴んでいた。自販機に呑み込まれて、どこか違う世界に行ってしまうように。彼は私のほうに優しく振り向いて、柔らかな笑みを浮かべてくれた。

「どこにもいかないよ」

私は彼の言葉を聞いて、うまれてはじめて笑った。ここが私の城だと思った。

自動販売機では彼はカフェオレ、私はコーヒーを選び、再びベンチに戻って並んで座る。

彼とふたりきりで並んで座るなんて今まで何度もしてきたはずなのに、今日はどうにも落ち着かない。こんな夜だから、いつもとは何もかもが違うから。何をしゃべるかも慎重になつて、言葉を選ぶばかりでなにも口から出る他愛のない言葉が見当たらない。じゃあいつそ、本音をすべて、バッグをひっくりかえすかのように洗いざらい話してみるのもありかもしれない。夜だし。はるくんは私になにか話したそうにしているのをやさしく待っていてくれている。私は意を決して口を開いた。

「ねえ、あー、なんの他意もなく聞いてほしいんだけどね、私、家庭が怖い。いつか私も大人になつて、誰かと結婚して、子どもを産んで、育てていくとするでしょう？なにが、とか、具体的にはなにもわからないのだけれど、とにかく恐ろしくつて。いや、こんなことを恋人であるはるくんに話すこと自体おかしいとはわかっていて。でも、こんなの誰にも、はるくん以外にはとても話せないから、ごめんね、今だけ少し、吐き出させて。あのね、私、夢を見たの、父親がなぜか、洗濯機の上でうずくまって死んでいて。猫が丸まって寝ているような姿勢でね。おかしいよね、そのうえ不謹慎。でね、それで、私は洗面所に立ち尽くしているの。そこにいる私も、

悲しい、とか寂しい、なんて感情はなくなつて、ただなにも感じずに、そこに立っているだけなの。私ね、そんな私が悲しかった。んー、ちよつと違うかな、自分自身に絶望したつていうか。こんなにも自分を大切にしてくれた父親が死んでも、私は涙一つ流すことはないんだなあって。本当に死んじゃつたとしても、ただ淡々とお葬式の準備やら死亡届の手続きやらをするのかな、とか考えちゃつて。ああ、あと母親は、まだ昼間なのに湯舟に浸かつているの。母親は父親がいなくなつて、生きる理由を失つたようだった。顔は青ざめて、ぜんぜん動かないの。そしてその置き物みたいな母がやつと口を開いたと思えば、『あんたが殺したんじゃないの』みたいなこと言われちゃつて。ああ、父は私が殺したのかな、つて。私ばかりだから言われたことすぐ信じちゃうんだよね、でも、なにも信じてないかも。あはは、ねえ、私つて、どうすればよかったと思う？」

こんなことを聞いても困らせるだけだし、痛いし、苦しいし、夜だし、外だし。でもちよつと期待した。彼なら、なにか新しい世界を見せてくれるかもしれない。私に解を与えてくれるかもしれない。彼が柔らかに口を開く。

「ゆきは前から大人になることを怖がつてるように見た。こつちが少し心配になるくらいにね。ゆきが考えてることとか、想つてることの深さがなんとなくだけど、俺にも伝わつてきてる。だからこそ気軽に『大丈夫』なんて言えないし、これといった答えも出せないけど、」

彼がカフェオレをひとくち飲んで、再び私と視線を合わせて続ける。

「いつでも俺のところに逃げてきていいからね。俺がゆきにとつて安心できる場所になれてるのはまだわかんないけど、俺はいつでもゆきの味方だから。今日はそれをちゃんと伝えたかった」

はるくんの口からそんな言葉を聞けて純粹に嬉しく思った。そう思うことができた自分にも少し嬉しくなった。

彼は少し気が抜けたような口調で話し始める。

「あんなに長かった髪、いきなり切るから本当に驚いたよ。しかも切つてすぐの頃なんて毛先ががたがたで。自分で衝動で切つたんだろうなつて。図星でしょ。俺、あんま表には出さなかつたつもりだけど内心めちゃくちゃ心配だったからね。ゆきになにがあつたんだ、つてね。でもゆき、自分のこと深くズカズカ訊かれるの嫌だろ、だからゆきにいろんなこ

と聞きたいの我慢してた。今日、来てよかったよ。ゆきも、出てきてくれてありがとうな」

たぶんこの人には左手首のこともばれているのだろう。この人には全部見透かされている。じやないと誕生日とはいえ、家まで押しかけてくるタイプじゃないだろうから。

彼はやさしく笑ってくれる。私がこんな弱っているからだろうか、今はなぜか、この人に私の全てを賭けてもいいと思える。つい数十分前までは「嫌いになってもらおう」とか考えていたくせに。

「今日、家来る？」

「もう電車、ないでしょ」

「今日くらいタクシー使っちゃおうよ、特別」

「かなり遠いけど大丈夫なの」

「へーき、遠いぶんいっぱいお話できるね」

意識しはじめたら、この人の言動、仕草のひとつひとつが好きだった。きっと前からそうだったのだと思う。他のどんな男に告白されても断ってきた私が、唯一付き合った人なのだから。

この日が、私の人生の中でいちばん正直に、私の全てを語り明かした日になったと思う。家族のこと、女になるということ、愛するということ。なにひと

つ答えは出ないけど、完全に安心しきった空間で思っていることをそのまま口に出すことが許されていることが、この上なく心地よかった。

はるくんのアパートで、あたたかいホットミルクを飲みながら、毛布にくるまって、ふたりだけの世界でゆるりとおはなしをする。今まで話さなかったこと、話せなかったことをぼつりぼつりと、ひとつずつ丁寧に明かしていく。私の鎧がいちまいいちまい優しくはがれていく。すっかり気が抜けて微睡みはじめる。

「わたしね、ホットミルク飲むのはじめてなの。なんかね、ずつとあこがれてた。眠れない夜にお母さんが作ってくれる、って言う友達がずつとうらやましかったの。もちろん自分で作って飲むことは可能なのだけど、それはなんか違って。だからね、今日はお母さんがホットミルク作ってくれてね、わたしがつごくうれしいの。んー、なんて言えば伝わる？ わたしね、気を遣って言うとかじゃなくって、ほんとに、すつごくうれしいの」

「だいじょうぶ、ちゃんと伝わってるよ」

彼のあたたかい大きな手のひらが私の頭にやさしくのった。彼は私のことを心底愛おしそうに見つめ

てくれる。安心する。

「わたし、なでられるのが好きなの」

あえて彼とは目を合わせずに言った。彼が微笑んでいるのが空気でわかる。私もつられて微笑んでいた。そして私はせかいでいちばんしあわせな眠りについた。

いつもの癖で、こんなときにも朝早くに目が覚める。まだ六時も回っていない。はるくんはすやすや眠っている。いとおしいと思う。起こさないようにそつと毛布から出る。

冷蔵庫を覗きに行く。このはるくんの部屋の冷蔵庫の中を見るのははじめてではない。

でも私のすべてを語り明かした後である今は、すべてのものがはじめてに見える。私はわかりやすく生まれ変わった。ちゃんと本当の私で見る、触る、感じる。

そんな生まれ変わった私でも瞳が無意識に探すのは、お味噌とお豆腐、そのほかにお味噌汁の具になりそうなものたちだった。前この部屋に来たときに、調味料が収納されているケースにお出汁の素と乾燥わかめが入っていたことを思い出す。生まれ変わったはじめてのお味噌汁は定番という。

慣れた手つきでお豆腐に包丁を入れる。すつ、すつ、と心地よくお豆腐が切れていく。まだ気持ちよさそうに眠っているはるくんの寝顔を思い浮かべる。私の表情は自然と柔らかくなる。こんなにあたたかい気持ちで立つキッチンのはじめてかもしれない。またはじめて。うれしいな。冷蔵庫の中に卵があったから目玉焼きも焼いちゃおうかな。

愛おしい人のための料理がこんなに心躍るものだとは知らなかった。私が立つキッチンに漂うのは、もう不穏じゃない。

今ごろ私の実家ではどうなっているのだろうか、帰ったらどんな酷い説教が待っているのだろうか、不安なことはもちろんあった。でも今の私なら、大丈夫な気がする。

「ゆきつ？」

はるくんの焦ったような、でもまだ寝ぼけているような声が聞こえてきた。隣に私がいなくて心配してくれたのかな。こんな些細なことでも嬉しい。私はもう、ひとりじゃないんだな。

「おはよう、朝ごはんできてるよ」

こうして私は女に、母になっていくのだと思った。